

## ■ 本文

二位殿はこの有様を御覧じて、日ごろおぼしめしもうけたる事なれば、にぶ色の二つ衣うちかづき、練袴のそばたかくはさみ、神璽を脇にはさみ、宝剣を腰にさし、主上を抱き奉つて、〔①〕「我が身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり。御心ざし思ひ参らせ給はん人々は、急ぎ続き給へ。」とて、舟ばたへ歩み出でられけり。

主上今年は〔②〕「八歳にならせ給へども、御としのほどよりはるかにねびさせ給ひて、御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。御ぐし黒うゆらゆらとして、御せなか過ぎさせ給へり。あきれたる御さまにて、〔③〕「尼せ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ。」

と仰せければ、二位殿、幼き君に向かひ奉り、涙ををさへて申されけるは、〔④〕「君はいまだ知らしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によつて、今万乗の主とは生まれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。まづ東に向かはせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向かはせ給ひて、西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、御念仏候ふべし。この国は粟散辺地とて、心憂きさかひにてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき所へ具し参らせ候ふぞ。」と、泣く泣く申させ給ひければ、〔⑤〕「山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、ちひさくうつくしき御手を合はせ、まづ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き奉り、〔⑥〕「浪の下にも都の候ふぞ。」

と慰め奉つて、〔⑦〕「千尋の底へぞ入り給ふ。」

（注）二位殿＝平清盛の妻、時子。安徳天皇の祖母にあたる。／神璽（しんじ）・宝剣＝三種の神器のうち二つ。／万乗の主＝天子・天皇のこと。／粟散辺地（ぞくさんへんじ）＝粟粒を散らしたような小さな辺境の地。仏教で日本をさしている語。／びんづら＝少年の髪型。／千尋（ちひろ）＝非常に深いこと。

## ■ 設問（全20問）

- 傍線部①「我が身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。」を現代語訳せよ。
- 傍線部①の「まじ」の文法的意味を答えよ。
- 傍線部②「八歳にならせ給へ」の「せ給へ」について、次の小問に答えよ。

「せ」「給へ」はそれぞれ何という敬語の種類か答えよ。

この敬語は、作者から誰に対する敬意を表しているか答えよ。
- 本文中の「あきれたる御さまにて」の「あきれたる」の意味として最も適当なものを次から選べ。

ア あきれて腹を立てている様子  
イ 驚きあきれて笑っている様子  
ウ わけがわからずぼんやりしている様子  
エ すっかり感心している様子
- 傍線部③「尼せ、われをばいづちへ具してゆかんとするぞ。」を現代語訳せよ。

6. 傍線部③は、誰が誰に対して言った言葉か答えよ。
7. 傍線部③の「ん（む）」の文法的意味を答えよ。
8. 傍線部④の中の「申させ給ひ」「おぼしめし」は、それぞれ二位殿から誰への敬意を表しているか答えよ。
9. 傍線部④「悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。」とあるが、これは安徳天皇のどのような状況を述べたものか、簡潔に説明せよ。
10. 傍線部④の「尽きさせ給ひぬ」の「ぬ」を文法的に説明せよ（助動詞の終止形か、活用の種類と意味を含めて答えよ）。
11. 傍線部④で二位殿が安徳天皇に「東に向かはせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ」と勧めたのはなぜか。当時の天皇と伊勢大神宮の関係をふまえて説明せよ。
12. 傍線部⑤「山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて」の主語は誰か答えよ。
13. 傍線部⑥「浪の下にも都の候ふぞ。」を現代語訳せよ。
14. 傍線部⑥の「候ふ」は敬語であるが、その敬語の種類を答えよ。
15. 傍線部⑥で二位殿が「浪の下にも都の候ふぞ。」と言ったのはなぜか。幼い安徳天皇に対する二位殿の心情にふれて説明せよ。
16. 傍線部⑥の「都」とは、ここでは具体的に何をさしているか。本文中の語を用いて答えよ。
17. 傍線部⑦「千尋の底へぞ入り給ふ。」を現代語訳せよ。
18. 傍線部⑦の「ぞ」は係助詞である。これに呼応して結びとなっている語を本文中から抜き出し、その活用形を答えよ。
19. この場面に描かれた安徳天皇の姿は、読者にどのような印象を与えるか。「幼さ」と「気品」という二つの観点から簡潔に説明せよ。
20. 『平家物語』について、次の小問に答えよ。
  - 『平家物語』はジャンルとしては何という種類の物語に分類されるか答えよ。
  - 『平家物語』全体を貫く、仏教的なものを見方を表す思想を漢字三字で答えよ。
  - 『平家物語』を琵琶に合わせて語り伝えた、盲目の芸能者を何と呼ぶか答えよ。